

【資料】

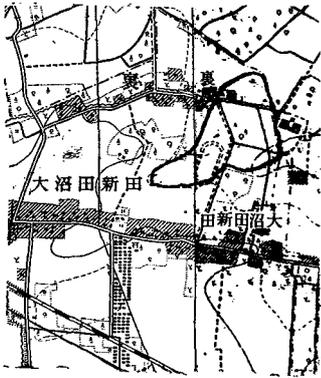
畑作新田で標識される武蔵野台地上の近世水田

太田 晃 舜

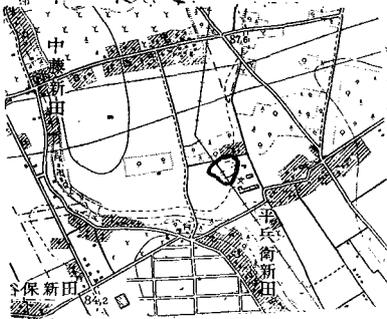
武蔵野台地は水利にめぐまれず、又透水性に富む土壤で、保水力が弱く、その開発は畑作新田の展開にのみ終

った^①とみなされるのが一般的である。併しここにも小面積ではあるが、水田作も分布していたことを見過すこ

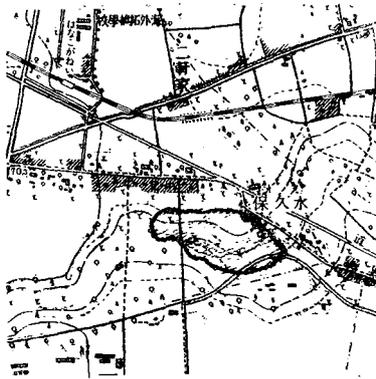
大沼田新田



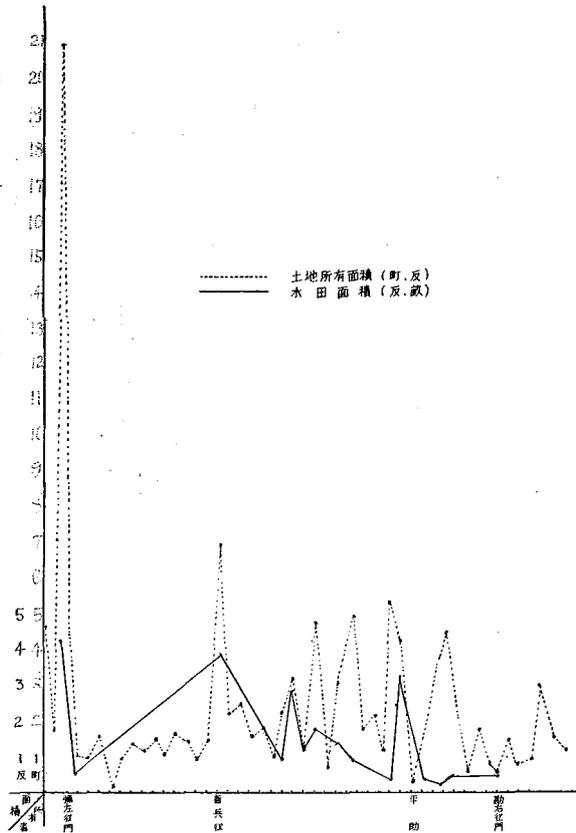
平兵衛新田



鈴木新田



第1図 旧水田分布概要図(1:50000)



第3図 慶応2年、大沼田新田土地所有と水田面積比
(矢嶋氏資料により太田作図)

り、総反別に対する割合は一・八%にも増大するに至った^⑥。
畑作標識地帯に立地する水田について検討するに、慶応二年の土地所有者五〇名の内、水田所有者が一四名である。その内勘右衛門は自己の全所有地六反八畝二四歩、

平助は一町九反七畝一三歩で、この二名の外、一二名の者は全部二町歩以上の土地所有者に限られ、特に弥左衛門の如きは二〇町九反五畝二歩の大土地所有者で、次は善兵衛の六町九反二四歩で、大土地所有の経済的に安定した者が食生活の向上を計る為か、その他の因子(後述する)によって、自然条件の不利を克服して耕作に従事して居つたように思われる。二名の小面積土地所有者は、出作り耕作者の地位としてやはり同様な原因から水田耕作もして居つた者と見るべきであろう。

水田耕作の名残は最近まで見られたが、併し水田化して稲作可能になると、容赦なく高い年貢をとられ、收穫も少ない上に封建的な水支配による用水不足等の理由により次第に減退してしまつたのである。

(2) 平兵衛新田

平兵衛新田は、現在の国立市街北側に位し、大沼田新田の南西約五杆の所に存在し、始めて検地されたのはやはり天文元年（一七三六）であつた。入植者出身母村は芋久保、三ヶ島、黒沢、大東寺、秋津、中藤、久米、大久野、砂川、川口、成木、五日市等で、享保（一七二九〜一七三四）だけでも芋久保から七名も入植している。宝暦一二年（一七六三）の村鑑帳^⑥によると戸数二二戸人口八八人、耕地面積四八町五反二畝三步で、一戸当り耕地面積二町二反五歩で、大沼田新田程の一戸当所有面積にならないが、当地の一般的土地所有型態の一例である。ここにも大沼田新田と同様に下々田ではあるが水田面積一反三畝一八歩もあり、総反別に対する割合は〇・三%となつており、大沼田新田の元文元年（一七三六）と同様な比率を示している。

(3) 鈴木新田

鈴木新田は、貫井村（現小金井貫井）の名主鈴木左衛門門よつて発願開発された村で、村高七四石余、反別二五二町余の武蔵野新田中では最も大きな部類に属する新

田である。元文元年（一七三六）他の新田と同様検地を受けたが、やはり長久保と称する低湿地利用の水田が存在した。その面積二町四反三畝二歩で、享保一九年（一七三四）に玉川上水からの引水により立地しておつたのである。

併しここも田になる様な所でなく、收穫も少なく、種も肥料も農民の損失となり、少し稲作が可能であっても雨天には水がわき、日照りには用水不足となり、その上年貢が高く、次第に減退し、自然消滅の止むなきに至つたのである^⑦。

以上の様な、水田立地の理由としては、農民入植時の出身母村や、その附近の部落で水田耕作を成しておつた習慣性の延長か、或は当時の一般的施策としては、普く水を利用して^⑧水田の増加や二毛作の増加を希望していたことと、農業経営上、畑作より水田作の方が土地の効用価値を高からしめる事等も関係しているであろうが、直接的理由としては代官所が命じて水田を作らせたのである。その他の理由としては、多摩川の水は菊地利夫氏も云われる通り、水源地面積と武蔵野台地上の面積比よりして水量が少なく、従つてそれよりの分水は困難視されておつたが、併し水田用水としては許可されたので、

用水誘致の政策も加わったのであり、鈴木新田の場合等は後者に属するのである。

いづれにせよ、かかる時代に点々と水田が立地したということは、人為的事象のみならず、同様な自然的立地因子も存在したものと考えられるのである。

(3) 水田分布の自然的特性

当地域は、隆起扇状地の高燥な所で、火山灰土は軽くて透水性に富み、土壌型は殆んど褐色土で、乾燥した時に強風がともなうと木造家屋等は家中に土ぼこりが堆積してしまう程度である。併しこの様な台地上にも湿害や洪水をこうむることがある。単調そのものの台地面もやはり微地形的には高低起伏を生じ、それが土壌の場所的差異を生ずる因子となり、又微気候も関係してくるのである。

当地の地形は、茱萸窪、久保などの名称のある様に、台地表面の単調さに異色をはなっている。この凹地は浅い谷や、閉鎖されたくぼみとあり、波状地形を呈しており、下総台地などと同様、関東ロームにおおわれた台地に共通した特徴で、その位置は宙水域と一致し、従って容易に地下水が得られ、しかも冬季の西北風からある程

度さえぎられるので、集落の立地にも適しているのである。

窪のうち独立して存在するものもあるが、いくつかの窪と浅い谷とが全体としてむしる複雑な系統を形づくっている場合が多い。

大沼田新田の属している谷は後者の例で、浅い谷はその底は台地原面より表土が厚く、やや土壌水分に富むので、好湿性作物に適しているが、気象条件によっては野水による湿害を被ることがある。

開発時代(享保年代)に小川新田から分水して飲用水、田用水とした。分水樋口は長さ六間、高さ八寸、幅六寸で、その末流を利用して水田が作られたのである。季節的に地下水型類似の土壌が見られるので、この水田土壌はこの様な条件下に出来たもので、柱状図から理解

大沼田新田の浅い谷の水田土壌

深さ	土層	土壌断面の特徴
0~15		暗灰色 微砂質粘土 湿潤、やはらかい。
15~47		暗灰色 微砂質粘土 角縁構造がたしい(下部は非常に 極色斑状に富む。
47~80	灰紫色 シルトローム	微粒構造 やかたしい。
80~100	暗褐色 シルトローム	やかたしい。 下層との境界明瞭
100<	黄褐色 シルトローム	やかたしい。

第4図 大沼田新田の浅い谷の水田土壌 (小平町史による)

されるように、古くから稲作を誘引すべき自然条件を備えておいたのである。併し常時水を保持する様にする為には、水田の床に人工的に地盤を作り、湿地としての立地を可能ならしめていたと云う程度の地域であり、土地の人はこの地盤を「しき」（敷に通ず）と称していることによつてもうなづけるのである。一方多摩川の出水管により、濁水が土砂を運搬し流水客土の役割をも幾分果しておつたことが稲作栽培に一層の好条件を与えておつたであろうことも重要な因子である。

本地域附近の地下水面の深度^⑧は一〇〜一五米内外で、地下水の水深は二・五米以下の地域が大部分を占めている。

平兵衛新田の台地上水田は「国立」の北側平兵衛新田部落の北西、国分寺崖線をのぼりきつた所に位置している。当時の用水は砂川十番より中藤新田を通過して引水したもので、現在もその跡が表土を取りさることによつて認められるのである。ここもやはり大沼田新田の様に水田の床に盤を人工的に作り、その上に稲作を行ったのである^⑨。

用水は飲料用、雑用、田用水に用い、農家の家敷内、家の土台近くを貫流していたのであるが、現在では同じ

用水も取入口は砂川九番からであり、各戸に井戸が出来ようになつてから利用目的の変更や、使用価値の減少等により流路が変改されるに至つていたのである。併し一部の者には昔と同様に利用されている面がうかがわれる。

この地の水の無かつたことは口伝によれば、開発当時木に竹皮を縛着し、それよりしたり落ちる雨水を飲料水として使用したとの事であり、自然のままでは、いかに水の得難い地域であつたかの例証となる。井戸の深さは地表より水面迄三〇米内外あり、段丘下では五〜一〇米内外となり、後者の場合は幾分波状型を呈している。鈴木新田は、長久保と称する空谷に立地しておつた。

その谷底には幾分段丘と蛇行の跡があり、かつて川が流れた証拠である。この谷頭部は台地より急に五メートル余落ち込んで、谷底にはロームが推積している、雨量の多い時には野水の集水地ともなり、且つ一時的にはあるにせよ水田土壤類似の環境となり、従つて用水さえ可能ならば一層水田立地に適しておつたわけである。

(4) 旧水田跡の現況

玉川上水は江戸市民の飲料水となる為、渇水期には分

水口の三分ふさぎとか五分ふさぎを行ない、せつかく収穫率の高くなつた水田も水不足と、高率年貢の為、それが向上の途上で水支配の影響から減退していつたのである。大沼田新田の場合、旧水田跡は泉蔵院の裏側に位置し、畑及びグラウンドになつてゐる。畑は麦、甘藷、カブ、白菜等が作られてゐるが、ごぼうの様な場合は深く耕やさなければ、根先が樹枝状に割れ、商品価も落ちるので、根菜類はなるべく栽培しないようにしてゐる。それは畑の下部二〇〜三〇センチ位で地盤（しき）があり、微砂質粘土の堅い面の為、自由に根をおろせないことを物語つてゐるのである。実際に土を取り上げ掌でにぎりしめ、その土が一塊になる程の粘着力と水分を含む所には、根菜類栽培に不適地とされてゐる。

平兵衛新田の場合、大沼田新田の場合と全く同様で、麦、大根、甘藷、馬鈴薯、白菜、ウド等の栽培地となつてゐる。用水路は地表面では識別困難であるが、地下三〇〜四〇センチ位に微砂質粘土があり、その周囲の土壤型と異なるので容易に識別出来る。水田跡所有主の言によれば、その畑は耕やすのに下の面が堅く誠に困難であつたとのことであり、やはり大沼田新田の水田と同様一面に地盤（しき）を作つて稲作を行つていた事情を裏書

するものである。鈴木新田も前述と同様に野菜畑として利用されてゐる。

以上から考えて、水田のあつた台地上はいずれも井戸が深く、雨水の影響は考えられないが、いずれも幾分低地で、雨量の多い時季の集水の可能性は考えられること、又いずれも用水を容易に利用出来る地域であつたこと、そして台地上の高い地域よりも幾分粘土質に富み一時的であるにせよ水田土壤類似の環境になり、又集落に近接した所に位置してゐたこと等は双方共通の水田立地上の理由であつたことが理解される。

平兵衛新田の場合、それ程明瞭な窪地とは云えないが、大沼田新田や、鈴木新田の場合には明らかかな窪地或いは浅い谷と称する事が可能な地域である。このような低地は小麦、裸麦、玉ねぎ、里芋等に適し、甘藷、大根、白菜等の排水良好の地を好む作物には適しないと云われるが、しかし、輪作上、適地適作は困難で、経済条件や労働条件からも、土地条件が無視されることが多いのと水田跡の「しき」をとりされれば、水田外の土壤型と透水性において左程相異がない等の諸条件により、かならずしも低湿地用作物景観を示していなが、大体の傾向を知ることが出来るのである。

この調査にあたり御指導頂いた籠瀬良明博士に深く謝意を表する次第である。

註

- ① 菊地利夫 武蔵野台地における前期畑作新田の建設とその経済的基礎
新地理 第五卷・第三号 一九五七年
- ② 矢嶋仁吉著 武蔵野の集落 一九五四年 一〇五頁
- ③ 山崎謹哉 武蔵野新田に関する若干の問題
新地理 第七卷・第三、四号 一九五九年
- ④ 新編武蔵風土記稿 卷之一二五 多摩郡 卷四〇
- ⑤ 小平町誌 一九五九年
- ⑦ 矢嶋仁吉 新田集落の地域構造、(歴史地理学の諸問題人文地理学会編 一九五二年)
- ⑦ 前掲③
- ⑧ 前掲⑤
- ⑨ 日本農民史 日本歴史地理学会編纂 一九三九年
- 黒正 蔵 日本経済史 二三九頁 一九二九年
- ⑩ 前掲⑥
- ⑪ 矢嶋仁吉 武蔵野新田集落の研究——大沼田新田の開拓とその集落景観——
地理教育 一九三八年

⑬ 平兵衛新田、中村氏外三名の実証と、筋者の検討による。